

6 ミニ漢検で伸ばす②

よりよい学校づくりのための塾からの提案⑥

花まる学習会代表 高濱正伸



◆公表

前号で述べた通り、学年履修範囲を三分の五分けにした、花まる漢検の結果を、私は秋の保護者講演会で、公表した。その要点は、現四年生だけが、極端に低い点数となつてしまった、これは大問題ではないかと明示することだった。

つまり前年度の担任の先生は、最低限必要な学力をつけずに上の学年に送り出したということ。現在全国で、起こっている公立批判の怨嗟のような声は、まさにこのようなきことが起こっても、誰も責任をとらず、というよりも問題点すら表面化しないことへの、大変な不信感に根ざしているのではないか。

三〇〇人以上の会員を抱え、三六五日ならずとも、平均睡眠時間が四時間も達しない中を、伊達や酔狂で通っているのでは

ない。この青木小学校ならば、世の中のために意味があることができると思っているからこそ、通っている。

ここまでの二年半は、自分でも何が可能なのか試行錯誤の面もあったが、このとき間違いなく勝負してよいと心の声が聞こえた。どう転んでも引き受ける覚悟をもって、公表したのだった。

◆相手を信頼すればこそ

その判断の根拠の一つが、現担任の二人の先生ならば、この結果を受け入れ、きつと改善の手を打ってくださるだろうという、直感での手ごたえを感じていたことである。一人は、面構えが良いというのか、気合が入っているKという中年男性で、ニラミが利き、生徒たちが信頼し付き従っているのを、感じていた。

もう一人は、若い女性なのだが、根の陽

ていただけないだろうなど、クビを洗って待つ気持ちで当日を迎えた。

ところが結果は、驚嘆すべきものだった。四年生二クラスともに、数十パーセントも合格率を上げ、他学年並みかそれ以上のところまで、たつた数ヶ月で上げてきていたのだった。のちにK先生に聞いたところでは、悔しさをバネに、クラスでもノートで練習させたりして、花まる漢検に向けた準備をしてくださったということだった。これは一学期にはないことだった。

また、保護者の一部に聞いたところによると、やはり親同士でも話題になり、これではいかんと、家でも練習を増やしたところも多かったという。

苦味を乗り越えて、クラスも親も協力してくれろという結果を生み出し、間違いなくこの学年は、短期間に確実に成長したのだった。

◆ぶつかってこそ開ける

細かい採点が終わり、その朗報が確定した二月、懇親の飲み会をしたのだが、その席で私は、当のK先生と心を開いて話すことができた。

二月。第二回目の漢字検定が行われた。この結果次第では、もう来年度は協力させ

担任への不満 一親の本音の拾い方

学年の先生と私でのコラボレーションの授業を行ったのだが、ご覧になったK先生のコメントはトゲがあった。

他の先生方のコメントは、「まあ穏便に」というシャンシャン株主総会的な雰囲気なのだが、K先生だけが、「能力に差がある集団ということを考えて、気がついたことを書かせてもらいます」という前向きとともに、指摘が書かれていた。図形を書くときは定規を使うべき。長さの単位cmを、「センチ」と言っていたが「センチメートル」と言うべきである。解説の仕方は、別の視点からのものの方がよかったのではないか……。

何をチマチマしたことばかり言ってるのか、とらえるべきテーマは別でしょうとも言いたかったけれど、「あー、怒っちゃったのか」という残念な思いがあふれ、黙っていた。事前の根回しのようなことが足りなかった点で、私にもいたらない点があった。勢い込みすぎて、進め方に配慮を欠いたなとも気づいたし、苦い感触が残った。

◆第二回花まる漢検

二月。第二回目の漢字検定が行われた。

この結果次第では、もう来年度は協力させ

がいつもあふれ出ているというのか、一緒にいる子どもたちが幸せになるような、ポジティブなオーラに包まれているY先生。今この力ない先生に言っても、落ち込んだり自信を失ったりするだけだという相手では、こんな冒険はできなかった。この二人ならばきつと分かってくれるという思いがあるからできたのだった。

◆激突

だが、結果は甘くなかった。「ガツクリ来ました。自分たちだけが学力が低いと言われた子どもたちが、かわいそうではないですか」と、私の助手として時に授業も担当していた部下に、K先生がもたらされたということであった。一言で言うと「怒ってらっしゃる感じだった」という。

このことが本当だということは、すぐに分かった。一ヶ月後に、共同研究で、ある

果も出ていたこともあるが、話せば話すほど、一つひとつの言葉を大切にされている方で、児童を愛すればこそ、我が子かわいさで、悪いイメージを伴う結果公表にムキになられたのだと分かった。

そして、そのように真剣に子どもたちを愛する人だからこそ、ぶつかりあえて、お互い真剣だったからこそ最後は分かり合えたなと感じた。「喧嘩のあと仲良くなれる」ということがあるが、まさにそのような重みをもったいい感触が心に残った。

一方で、もう一人の担任であるY先生は、その後、わざわざ埼玉にある塾塾を、見学にまで来てくださった。こちらの思いを、真心をもって受け取っていた。だいたなど、本当に嬉しかった。

いかがだろうか。世の公立小学校の校長先生方、同様のミニ漢検を実施し、結果を公表してみてもどうでしょうか。特別な思考力問題ではありません。ただの漢字。しかも前学年の範囲です。

少なくとも保護者たちは、「すぐにやってください」と言うでしょう。ほとんどの愛と実力あふれる先生を信頼しつつ、そうでない最低限の結果も出せない先生には、いてほしくないという強い意志とともに。